季節風

民営化の光と影

情報広報部長　中川俊男

尼崎JR脱線事故の大惨事から１カ月が過ぎた。旧国鉄時代から、汽車や電車はどんな遠い所にでも行ける最も安全な公共交通機関だった。まさか、線路上を走行する電車が単にスピードの出しすぎで脱線・転覆するとは思いもしなかった。旧国鉄の分割・民営化から18年が経過したが、事故の報道が進むにつれて明らかになるJR西日本の企業体質を見ると、事故の再発が心配になってくる。

埼玉大の安藤　陽教授は事故の原因となった三つの背景を指摘している。第一に株式を上場し利益優先に走ったこと。第二に民営化のために旧国鉄が余剰人員対策として、職員に人権無視ともいえる扱いをしたこと。第三は経営幹部の意識。特殊法人国鉄時代の官僚体質や事なかれ主義が残っていることだ。

この企業体質の対極に佐藤乙松という国鉄職員がいる。浅田次郎原作による1999年６月公開の映画「鉄道員（ぽっぽや）」の中で高倉健が演じた主人公だ。見た人も多いであろう。妻の臨終にも一人娘の臨終にも立ち会わず、廃坑が決まった町のローカル線駅の駅長としてホームに立ち続けた。最後まで鉄道員としての誇りを公私の区別として表現し、自らも職務中に駅のホームの上で殉じた。愚直なまでの勤勉な生き様と家族への不器用な愛の表現に、映画を見た中高年男性の多くが共感し目頭を熱くした。

国会では郵政の民営化関連法案をめぐって紛糾しているが、民営化の全てが悪いわけではない。電電公社は分割・民営化しNTTとなったことで飛躍的に業績を伸ばし、利用者へのサービスも格段に向上した。しかし、JR西日本のように経営形態が民営化になっても経営陣の発想や企業体質が特殊法人の国鉄時代と同じであれば、結末は恐ろしい。利益を上げることが圧倒的な正義であるという発想を全社員に植え付けることで、民間の先輩である私鉄との競争を乗り切ろうとしていたのであろう。そこには人命を運ぶという使命感も企業理念もなく、運転士としての実績も誇りも踏みにじる日勤教育という名のいじめさえも日常化していたというのだから驚く。あきれたことに、事故当日に隣の車掌区では事故を知りながらボーリングや宴会に興じていた。

携帯電話の呼び出し音が、大破し押し潰された車両の中でいつまでも響いていたという。その車両に乗っていたかも知れない身内の安否を気遣う家族の胸中は察するに余りある。この大惨事は民営化による利益第一主義が招いた悲劇といえるが、佐藤乙松たちが築いてきた鉄道の安全神話を一瞬のうちに崩壊させた。

はっとした。国民から見ると、われわれも同じではないのか。会員が不祥事、重大な医療事故や犯罪を起こしたときに、人命を預かる医師の団体である医師会が、国民になんら見解も表明せず、まるで何事もなかったかのように予定通りの会議や懇親を続けることは、国民の目にはJR西日本の体質と同じように映るのではないだろうか。

医療への市場原理の導入という強引な「民営化」が迫られ、政府が医療費の伸びをマクロ指標を使って抑制することを目論み、患者の自己負担の急増が見込まれる中でも、われわれは利益を上げることが正義であるなどとは決して思わない。JR福知山線の脱線事故を他山の石とし、医師、医療機関、そして医師会がどのような理念をもって利益第一主義の営利企業の参入に反対し、地域医療を守ろうとしているのか。国民の側に立った医師会であることへの理解を得る行動が急がれる。